

貸本小説と貸本屋の世界

江戸時代から商業として成り立っていた貸本は、明治以降には学生や知識人層にも利用され、戦前期まで新刊書・古書・貸本を行う店や書店が一般的でした。

戦後、貸本専門店が全国的に急増し、とくに貸本漫画市場の成長は、手塚治虫や水木しげるなどの作家を輩出させた一方、貸本専用の気軽な娯楽に徹した「貸本小説」も多数出版されました。利用者層も年齢・職業など大きく幅を広げ、庶民の大切な場所になりました。

しかし、1950年代後半から新刊市場の再建や価格低下、図書館の普及などにより、貸本の需要は下落し、貸本小説や貸本漫画、そして貸本屋も姿を消していきました。

本展では、大衆小説研究家・末永昭二氏の監修のもと、貸本屋が果たした役割や忘れられたエンターテインメント「貸本小説」の魅力を再認識し、北海道・小樽の貸本屋の歴史・実態も追っていきます。

同時開催

企画展「マンガ家・つげ義春と調布」(ミニ巡回展)

つげ義春氏は、東京の葛飾区で生まれ、1950年代から貸本マンガ家として多くの作品を手がけました。1960年代に「ねじ式」や「ゲンセンカン主人」といった作品を発表し、マンガが芸術の一分野として認識されるきっかけを作りました。1966年には、マンガ家の水木しげる氏の仕事を手伝えるために調布へ移り、その後もずっと調布で暮らしています。

今回の企画展は2023年1月に行われた調布市立図書館主催「マンガ家・つげ義春と調布」から抜粋したミニ巡回展であり、国際的に高く評価されているつげ義春氏の代表作の原画(複製)を展示し、特に1970年代以降の日常風景として描かれた調布の写真や地図を通じて、作家の住んでいる場所が作品にどのような影響を与えたかを考える場としたいと思います。



小樽市錦町 貸本・勲功堂書店にて (昭和30年頃)

ご協力いただいた方々 (順不同・敬称略)

末永昭二
黒沢哲哉
稲垣陽一
山岸康治
守谷明宏
本多正一
渡邊真一郎

じゃんくまうす
博信堂書店
レトロスペース坂会館

北海道立図書館
市立小樽図書館
小樽市総合博物館



貸本マンガに読みふける子供たち (苫前町古丹別 昭和30年頃)